

芸術文化関係者と市長との「“本気”で語ろう会」 会議録

団体名	芸術文化関係者
日 時	平成 29 年 4 月 19 日（水）15:00～16:50 まで
場 所	全員協議会室
参加者	芸術文化関係者 12 名
	市長、教育次長、生涯学習課長、生涯学習課長補佐外

意見交換

鹿屋の芸術・文化の振興のためにできること～次代を担う芸術文化関係者からの提言～

- ・ 鹿屋の芸術文化活動を発展させるために必要なこと
- ・ やってみたい芸術文化イベントについて など

○ 芸術文化関係者の自己紹介

○ 市長あいさつ

今日はありがとうございます。市長になって3年程経ち、今回は39回目の語ろう会となる。会の中での意見について、何か一つでも二つでもできることはやらせていただきたいと思っている。

生きるために仕事以外に文化芸術に親しむことは心を豊かにし、人生を豊かにする。このような活動はいつから始めても遅くはない。皆さまに、鹿屋市の文化力の向上に努めていただいていることに、感謝申し上げたい。

文化芸術の機運を高めるために、行政として何ができるのか、文化というのはジャンルが広いので、一つの組織としてある程度まとまって動いていただかないと、特定のジャンルだけで言われてもなかなか難しいところがある。

今日は忌憚のない意見を出していただければと思う。

（意見交換）

市長： できるだけ簡潔に、多くの意見をお聞かせ願いたい。自分の取り組んでいる文化芸術についてでも良いし、行政への要望、抱えている課題でも良い。鹿屋市の文化芸術でここを高めれば変わるのではないかなど、まずは一言ずつお願いします。

藺田： 私は、フラダンスを教えている。習い事をしているとステージがあることが長く続ける要因になる。発表の場を作りたいというのが一番にあるので、ボランティアはもちろん施設や病院に率先して行っている。フラダンス人口が増えていて、各地でフラダンスのフェスティバルがあったので参加していたが、フラダンスのフェスティバルを自分たちでしてみようということで、去年は、山の日に輝北町で、フラダンスのイベントをしてみた。自分たちの教室だけではなく他の市町村のフラ教室等に声をかけて、皆さんに喜んでいただいた。今までは教えることがメインだったが、今後はこういう場が作れ

ないかということで、自分で動いている。志布志で手作りのイベントをする予定。自分たちでできることしかしていないが、いつかは市も一緒に入っていただけるのが理想。

市長： いろんな広がりがある中で、一步一步の取組は大事だと思う。

川畑： 鹿屋市文化協会は 43 年前に市から独立している。市町村から独立している文化協会は他にはない。鹿屋市の文化祭は鹿屋市文化協会の会員が主になっている。私は、串良、吾平、輝北の文化協会、吹奏楽、管弦楽など、いろんなジャンルが融合した鹿屋市芸術祭みたいなものをしたい。実行委員会を立ち上げて、文化協会が主になりながら、見応えのあるいろんなジャンルの融合したストーリー性のある鹿屋市芸術祭をしたい。

山下： ビッグバンドを作って 5 年しか経っていない。いろんなイベントに参加したいので、どういうイベントがあるか知りたい。一昨年、上小原小で演奏した。学校行事でも演奏したい。

市長： いろんな学校行事、福祉施設等もあるし、夏まつりもある。串良だけでも相当ある。二十三や市でも演奏したらおもしろそう。そのような情報は串良総合支所にあると思うので話をしておく。

假屋： そばきり踊りをしている。そばきり踊りは鹿児島市の谷山地区でされていて、昭和 30 年頃吾平でもするようになったが途絶えてしまった。私たちが小学生の頃、当時町内会の保護者が「何かしよう」ということで子ども会で復活させたが途絶えた。2000 年頃にそばきり保存会が作られて、子どもたちにもう一度そばきり踊りをしようと打診した。現在は、高齢者の指導の中、子どもたちが練習をしている。この踊りは、種から育ててそばができるまでの踊りなので、子どもたちにそば打ち体験もさせている。これにより、もっとうまくなったり楽しんでいるのをみて私たちは満足している。そばきり踊りは吾平町文化祭の前夜祭で出演している。

吾平小でも伝統芸能活動の支援で教えている。今は中央麓地区の子ども会の小学生を中心にしているが、今後希望する町内会全員の子どもたちができるようにして、大人になって「あのころはこうだったよねー」と言えることが、育児のひとつになると思う。

市長： 夏に「リナシティまるごと博物館」を開催する。伝統芸能がすたれていつている中、残すべき文化は残したいという思いがある。地域に残したい伝統芸能、一方では若者の文化、パフォーマンスもを併せ持ったイベントである。一日リナシティを博物館にみたててやろうということで開催する。そばきり

踊りも、ぜひ参加していただきたい。

山下： 吾平は今、伝統芸能がにぎやかになってきている。子どもたちにとってすごくいいなと思っている。子どもたちが一生懸命することによって、大人たちが手伝って、子どもが大人になって、また子どもに伝えていく。子どもが一生懸命するから、近所のおばちゃんが手伝う、おじいちゃんおばあちゃんがついてくる。昨年からもう一つ、子どもたちが棒踊りを立ち上げた。それに対して親が応援する。そういうのを見ると、子どもから伝わっていくのがわかる。子どもたちが本物の芸術にふれる機会がいっぱいあるといいなと思っている。

市長： 小さい頃から文化に親しむ機会を設けるのは大事だと思う。いろんな経費がかかると思うが、吾平で言えばコミュニティ協議会の取組等を活用してほしい。

迫田： 私は日本舞踊で文化祭に出たり、施設に慰問に行ったりしている。原田流も最初は 50 人近くいたが、今は 6、7 人でほとんどが高齢になってきている。次世代に繋げたいが、私たちの世代も育児、仕事を両立している中で時間を作るのが難しい。学校にもダンスの授業があるが、その中に日本舞踊、詩吟、大正琴など、子どもたちが文化芸術に参加できるような授業が鹿屋市の形になるといいなと思っている。

市長： 高齢化の問題は全てにつきまとう。ハードなスポーツから軽い運動になってそのうち運動はやめて文化芸術になど、一生のうちで趣味は移り変わりがある。小さい頃からそういうことに親しむというのは大事でしょうから、学校教育で少しでも紹介できればいいと思う。外国から人が来たら着付け体験があるが、学校ではあまりない。今、どこに行っても、お正月でも着物を着ている人がいないが、文化協会総会では着物を着ている人がいらっしやる。日本文化が広がれば、着物を着る文化も増えるかもしれない。

川畑： 高齢化に伴い、地域文化の担い手となる人材の育成が必要と考えている。若手に文化を引き継いでもらうためには、見るだけではなく体験したり学んだりする機会を増やしたい。学校応援団で小中学校に少しでも着付け、日本舞踊、お茶等の伝統的な日本文化を加えていただければ、1 人でも興味を持てば、次世代に繋がるのではと思う。子育てを終えた私たちの世代が狙い目だと思う。文化協会もボランティアで出て行けるので、見ていただき、体験していただいて、触れていただきたい。自分たちも、努力しながら次世代に繋いでいかないといけないのではないかと考えている。

例えば、ヒメヒコ 10 周年で小中学生を招待したところ、今年は入会者が増

えている。このように、知っていただく形で文化継承に繋げたい。

ぜひ、鹿屋市文化祭とは別に鹿屋の文化の総決算のような芸術祭をしてみたいと思っている。

市長： 最近いろんな人と話をする中で、太鼓に入る人は相当増えているようだ。ストレス社会、共働きの中で、時代に合っているのかもしれない。「健康マージャン」というのを中央公民館講座で応募してみたらたくさん来た。今後の文化芸術については、いろんなジャンルがあるからどこにいくのかわからないが、最近では体を動かすものや、あまりお金がかからない新しいものが求められているようだ。市の文化祭を芸術祭にするのか、別に芸術祭をするのか、いずれにしても大がかりになるから、テーマを設けたり、差別化を図らなければならない。いろんな意味で可能性について探っていく必要があると思う。

田原： 私たち鹿屋吹奏楽団は、4月の定期演奏会を目標に頑張っている。最近では知的障がい者の施設やライオンズクラブでも演奏した。定期演奏会の集客も難しく、開催を知っていない人が多いのが現状なので、ここにいる方たちと合同でイベントができればいいなと思うし、広報も市と一緒にできればいいなと思っている。

市長： 演奏する以上はある程度の集客がほしいから、日頃からの活動、どういう形で市民のみなさんに知っていただくかということは大変でしょうから、小さなイベントに顔出ししていろんな形で浸透させていくとか、他の団体と合同で行うとかいろいろ試していただきたい。

徳田： 市民合唱団も、2月に定期演奏会をしている。私は合唱団に入ったとき若手だったが、今でも若手である。市民合唱団は九州大会に出場する等頑張っている。

私は、少年少女合唱団を指導して7年目になる。当初は女子校の先生が指導していたが、地域の方が指導した方が良いということで指導することになった。現在は中学生まで所属しており、中学生が低学年をみるようになり、すごく良い関係ができています。ほとんどの中学校に合唱部がない中で、少年少女合唱団員として頑張っている中学生に対して、中学校側には部活と同様に評価してほしいと考えています。

また、音楽教育について、学校の教科書と関連した音楽・楽器はDVD等よりも本物が良いと思っている。鹿児島市ではそういうのを市がバックアップして生で演奏を聴かせるというのがある。鹿屋市でもそういうのができたら、いい機会になるのかなと思う。

市長： 鹿児島市と比べられるのが辛いところではあるが、鹿屋市でもいろんな小

中学校の皆さんに楽器を持っている人に行ってもらったり、各種団体を使ってやったりというのはある。地元の各種団体に協力をいただくというのもありかもしれない。合唱、楽器だけでなく、今年から松竹芸能とタッグを組んで「笑育（わらいく）」をやろうと思っている。学校からの要請に基づいて教育委員会が派遣することについては、いろいろな可能性があると思うので、教育委員会で検討する。

宮内： 私は県内小中学校の芸術鑑賞会で演奏をしている。個人的な依頼で幼稚園での演奏はある。鹿児島市では、アートネットワークが学校に音楽家を派遣するという事業はあると聞いたことがある。体験型の芸術鑑賞会を実際したが、聴くだけでなく楽器を触ることで、きっかけ作りになるのかなと思った。

オーケストラも高齢化が進んできていて他団体と同じ状況。高校の定期演奏会は満席。違いは演奏レベルと見せる音楽であることがわかった。私は指導者として消防音楽隊にも入っているが、彼らは仕事として音楽をしているので、見せるというのが一つの手法だと思っている。

昨年の日露交歓コンサートはすごく良かった。鹿屋では、一流の演奏を聴く機会がなかなかない。文化会館やリナシティでプロによる演奏が聴けて、また、マナー教育もできたらいいなと思っている。

松永： 鹿児島に帰って来て 10 年、それまでは沖縄で 10 年。県の芸術文化振興会の会議に出席した際、予算折衝が中心なのに驚き、貢献できるという視点を持ちたいという話をした。沖縄、静岡は先進地。文化と観光をセットにしてお金を稼げるような仕組みになっている。先進地は攻める仕組みになっている。観光と文化をセットにしていきたい。鹿屋市は、県内では優秀な方々がいるところ。潜在能力が高い。一緒に鹿屋市をどう豊かにしていけるかと考えるのが必要なのではと思っている。沖縄は国力の高さを文化でみせていた。われわれも、鹿屋市が豊かになるために貢献できるとなれば、頑張りがいがある。

市長： 鹿屋市はスポーツ合宿、平和学習（宿泊体験）、食文化（グリーンツーリズム）に取り組んでいる。観光資源がないので新たな資源の磨き上げを行っている。文化を観光の素材として位置づけてやるということはそれなりの意義がある。文化芸術で人が呼べるようにするというのは非常に面白い。それによって、市民が鹿屋に魅力を感じるというのは良い。昔は芸術家には支援者がいた。最近そういう人が少なくなってきた。

松永： 活動するにあたっては大変ではあるが、劇団に所属している人も昼間は農業をし、夜は芸術をすれば何とか生活できるのではないかとと思っている。

田口： 私は文化と芸術は分けて考えていて、新しい価値観をつくるのが芸術だと思っているが、国民文化祭から文化に触れるようになった。ステージの上でやることだけが文化だとは思っていない。地域とか家庭の中でどうかできないかと思う。太鼓も昔の人のストレス発散の知恵なのかもしれないと思う。普通の人々が文化を意識するには、「観光」だと思う。そこで「文化会館の観光地化」を提言したい。ホールが文化発信の拠点となるようなイメージ。食事をする場所でも良い。打合せの場所にも困っているので、鹿屋の催事情報が入手でき、みんなが足を運びたくなる場所になるといいなと思っている。

かごしま文化維新プロジェクトA C Tに関わった。成功だったが、それが継続するのかわからない。行政にお願いしたいのは、芸術祭のような事業をするのであれば、数年かけて継続的な計画でみていただきたい。そして、出演者側はちゃんと実績をだす。そういうバランスが必要だと思う。

市長： アーティストの皆さんが何を目指してどういう目的でやっているか。われわれとしては、どうお手伝いできるか。生きたお金の使い道、どういう形で使うのか、ちゃんとした使い道になっているのか。文化芸術は行政が深々と入り込むジャンルではないと考えているが、いろいろな話が聞けた。

有馬： 私は障がい者アートに関わっている。全国的には関西が先進地で、奈良県では行政とろうきんが一緒になって東大寺や町屋に作品を飾る等の取組みをしている。九州では北部が盛んで、鹿児島では、しょうぶ学園がアートの森で展示を行っている。芸術文化活動は障がい者にもふれあう機会があつてしかるべきだと思っているので、それぞれのイベントに入っていけたらと思っている。このような活動は、障がい者が自立するための一つと位置づけられている。例えば、海外のギャラリーでは1作品が2～3百万で売れて生活の糧になっている人もいれば、商品パッケージになって糧にしている人もいる。そこで、絵画コンクールの入賞作品を、名刺やふるさと納税のパッケージデザインとして活用していただければ糧の一部になるのではないかと思う。このようなことを地元の企業に紹介できたらと思う。

音楽に関しては、とっておきの音楽祭が芸術祭と一緒にできたら良いのではないか。集合することによって、何日間かに分けていいので見せる芸術祭ができればおもしろいと思う。

市長： みなさんから様々なご意見をいただきました。

さて、文化協会が1市3町で統合されていないところである。将来に向けて団結しなければならないと思われる。いろんな団体があるので束ねるところがあればよいのではないか。

松永： アートネットワークは情報を集めて学校と繋いでいる。やる側は発表する
あてがなかったりするところを、ネットワークということで一覧にしてそこ
が紹介するというのがあると良い。

川畑： 文化協会では、会員については、そのようなことを行っている。文化協会
で一つにまとめることについて協議したことがあるが、それぞれの文化があ
るということ、一つにまとめたときにどこが運営するのかというのが課題だ
った。

市長： 鹿屋市全体でジャンル別に手伝いできることの情報があって、学校や町内
会等必要な人に直接繋がられるような仕組みができれば良いが。

假屋： そばきり踊りについては、学校の授業で伝統芸能を子どもたちに教えてい
て、子どもたちが自分たちでそういう話を出してきて、私たちが動いた。踊
りを見て子どもたちがどんな風に考えるのか、実際に踊ってみてどう考える
のか。そこから「僕たちもしたい」「私たちもしたい」という話になってい
くので、情報を集めることも含めて自分たちが動かないといけないと思う。
伝統芸能祭も行政を頼るのではなく自分たちがどうしていけないといけない
のかということを考えながら動くのも必要だと思う。

市長： 行政というよりも文化そのもののレベルは、鹿屋市はどの程度か。

松永： 低くないと思うが、文化行政のレベルが高くないと文化レベルも上がらな
い。わかりし需要もあるし供給する人もいるが、トータルのマッチングがで
きていない。把握してコーディネートが必要。

市長： 情報管理をして全体を上手くコーディネートをするというのは、事務局を
置かないと難しい。

松永： 文化レベルを上げるためには、打ち上げ花火的なイベントをするよりは、
そこの整備をすることが最優先だと思う。

藺田： 文化協会もメリットがあるのか。文化祭に出られるだけだとメリットを感
じない。魅力ある文化祭をみんなで作っていかないと。輝北町でも文化祭を
したいという話がでたが、ただやるだけではだめ。指宿市はフラダンスに絞
っているので、全国に知られるイベントになっている。鹿屋市が「こうした
い」というのを掲げないと難しい。市の方向性を示し、コーディネートでき
る人が作り上げていかないと魅力ある文化祭にならない。

市長： いっぱいジャンルがある中で、ただ発表の場を作るだけではなく、ある程度テーマ性を持ってやらないといけない。

川畑： 薩摩川内市だったらハンヤ、指宿市だったらフラダンス。見せる芸術祭にしたい。松永さんのような演出家がいるので「ミュージカルのまちかのや」でもいいし、何のまちかのやと絞っていくのもいい。

松永： 演出はいろんな素材をどう光をあてるかで変わってくる。一つのテーマに合わせて全部その色に染めながらいろいろできる。観光と同じで、戦略を持って皆で進んでいかないとどことも差別化できない。

市長： 演出で全員を一つの形ということだが、ヒメヒコも1年かかる。合唱もオーケストラも、何もかもとした場合、相当な作業。1つ作るのに5年くらいかかるのではないかな。

松永： ディズニーランドがなぜ大きくなるかという、コンテンツだけでなく、産業とも連携して売上を出して制作費にまわしているからだ。そのような形にできるのが理想だが。

川畑： 短いスパンではなく1年、2年、3年かかるかもしれないが、少しずつ、一歩踏み出してそういうものをしていけば良いと思う。また、その際は、文化と観光等いろいろなものを融合できれば良いと思う。

市長： われわれが鹿屋に生まれたことに誇りを持つためには、文化的な何かを持ちたい。

市長総括

観光と文化を融合した新しい何かを作る等いろいろな意見が出た。当然発表の機会の確保も基本だし、学校に出向く場を提供する仕組みも考えないといけない。そういう意味では大変興味深かった。今後はいろいろな形で、将来に向けて時間をかけて良いものを作って、皆さんが一緒になって取り組んでいけたら良いと思う。

今回は、皆さんの話の中から、これまで知ることの無かったいろんな情報を得ることができた。文化や芸術は一朝一夕にできるものではない。今日の話を一歩でも二歩でも進めるために、皆さんに相談しながら進めていきたい。